

# 水野仙子と私

根元松江

水野仙子、本名服部貞子。私たちはお貞さんと呼んでいました。

須賀川町、当時はまだ市にならず、町立の小学校は尋常四年と高等四年とありまして、八年かゝって

修業する卒業する過程でした。

その八年間、ほとんど無欠席で過したお貞さんは、いつも首席を占めて誰れからも親しまれていました。落付いた人で余り高々と笑つたり話したりなどはせずに、しつかりしたおとなしい人柄でした。

八年間一緒にても仲の良いお友達はそう沢山ありません。中に四、五人くらいが本当のお友達らしく、その中で私などは抜け出してあはれた方でした。尋常四年くらいの時は、わるさいたずらも、目に付くほど大きくなりました。

古い須賀川の小学校の校庭には、それはく、古い大木の枝垂れ桜がありまして、春になると町一番の早咲きの桜と言われていました。その近くに井戸があり、芭蕉の句碑が立っていました。

元通りに石碑を洗いあげて、とび歩いていたことでしょう。後になつて折々思い出して、可笑しさとくすぐつたさと、いろ／＼と感じたのは私だけではなく、後になつてお貞さんとの一件は話に出たものでした。

八年間の課程が終つて卒業後、この学校に裁縫専修学校といふ名のもとに三年間、そこでお習いしました。その頃お貞さんは例の女子文壇に小説をさかんに出して、東京へ進出する準備をしていました。折々、私どもに紅葉山人の弟子になるなどと書いていました。

でも、上京して田山花袋の門に入つた事は後でわかりました。割合いに遅く結婚されて間もなく、肺を病み、

須賀川の公立病院へ入院され、私も暫くぶりでお会いしましたが、思つたより顔色も良く、大した病気でないよう見受けました。

枕元の机の上に、セルロイドの裸人形に豆絞りの鉢巻をさせておいたのを見て、私は可笑しくて、やはり昔のお貞さんらしいと思ったのでした。

何んで、あんたの様な丈夫な人が、そんな病気になつたのと聞きますと、夜おそくまで書いていたのが無理でしたと言つてました。

これが最後だったので、三人の児の母だった私は、主人の家にお祭り招ばれに行っていました時に、不意に、お貞

その句は「世の人の見付けぬ花や軒の栗」の名句、その文学の美しさは子供心にもいつも感じられて、時間のある時は句碑の文字をなでたりした事を忘れません。

その様が美になると黒々とした小粒の実が校庭一面に落ちて掃いても／＼後から敷き詰めていました。その様の裏に立たなければ私共四人位でその中にお貞さんもいたのです。

當時、私どもに先生はかなり恐ろしい存在でしたが、開口一番、前の句碑を染めたものは誰か、手をあげよと言わされましたので、真黒な手が四本あがつたのは確かでした。

先生はすぐに、前へ出てあの句碑に雑布をかけて洗つて来いと、それはく、厳しく叱り付けられました。四人はすぐに、小さい手桶の雑布桶を持ち出して黙々と石碑に雑布がけです。

校庭には人ひとりいません。授業中で深閑としていました。一言も言う事はできなし、しゃべる人もなく雑布をかけてしまったころは、授業も終つてカラランカラント放課の鐘です。

さんの死去を新聞で見ておどろいたのを覚えてます。

八年間無欠席で通したお貞さんが、三十三才で他界するとは。一度も無欠席もなく通した私がまだ生きている。

こんなことがあるのだろうか。あゝ、明治は遠くなりにけり、殊に私には遠い遠い彼方に往つた感じです。

## 幼な道

丹

藤

秋

羅

母の背に負んぶしていいた頃の、幼なじ日の想ひ出である。

髪を刈られることの大嫌いだった私は、家から半道ほど道程を歩いてゆかねばならないその道を、駅前の髪床へ母に連れてゆかれるのが何より厭で、その時になると何時も逃げ廻り、果ては泣いて暴れたりして母を古づらしたものだが、それでも遂に捕えられ無理矢理負われてしまふと、店に行きつづきまで手足をバタ／＼さして泣き止まなかつたらしい。

今、考えて見ても、その髪床へ行く道は近道なのだが細く曲りくねつた道の両側には秋など吾亦紅や、女郎花